

クルゼイロとブラジル経済

はじめに

ブラジル政府はさる1965年11月13日、経済再建のための総合政策の一環として、1966年1月1日以降適当な時期に通貨審議会の決定によって、現行通貨単位クルゼイロを廃し、その1000倍の価値を有するクルゼイロ・ノボを採用する旨の発表を行なった(注1)。この実行の時期と手続きはまだ一般に知らされていないが、これによって1942年10月ミル・レイスに代わって登場したブラジル通貨クルゼイロの一生は、須臾20余年にして終わろうとしていることがほぼ確実となった。

クルゼイロの登場から今日までの24年間、ブラジル経済の変転は実に目まぐるしいほどであった。第1にクルゼイロの象徴する時代は工業化の時代であった。国内市場をみたく消費財生産のための工業化は目覚ましい勢いで進められた。クルゼイロ登場のころ、すべての部門でブラジル市場を席卷していた輸入品は、今やほとんど国産品にとって代わられている。と同時に工業化は、かつての花形であった輸出産業とくにコーヒーをも無視する勢いであった。第2にクルゼイロはインフレーションの象徴でもあった。物価はこの20余年間にほぼ100倍騰貴した。そして当初インフレーションは経済開発と両立すると主張され、軽視されていたが、最近では年率50%、70%を越える物価騰貴を招いて、クルゼイロの命とりとなるにいたった。第3に、クルゼイロは国際的に信用のない通貨の代表であった。国内産業は開発しても輸出の大宗は依然として冷遇されたコーヒーが占めていて伸び悩み、国際収支は常に不安定であり、クルゼイロの対外価値は下落に次ぐ下落を続けてきた。

最近2、3年のブラジル経済を振りかえって見ると、モノカルチュア経済から抜け出すための工業化が一応成功を収めたようではあったが、インフレーションと国際収支の面に深刻な問題が表面化して、行きづまった状態にあったことがわかる。そしてクルゼイロ登場当時から標榜された経済的独立は、外国貿易を無視して国内の工業化にたよるのみでは達成できないということが、今や明白となった。より広範な総合的経済開発に取りかからなければならない段階に差しかかって、クルゼイロが退

場し、クルゼイロ・ノボが登場することはこの意味で非常に象徴的である。クルゼイロは正に過渡期的な存在であった。

(注1) 1965年11月13日付 Decreto-lei 第1号。

I クルゼイロの登場

1. ミル・レイスとモノカルチュア経済

ブラジル通貨の呼称は、クルゼイロ以前は、母国ポルトガルから受けついでレアル (real, 複数 reis) であった。このこと自体ブラジルがポルトガルに対し植民地として従属的關係にあったことを示すのであるが、実際、このレアル流通の約400年間ブラジル経済は一つの基本的な特産物の輸出に依存して生存するという、典型的な植民地型モノカルチュア構造を有していた。

第1の輸出品は国名の由来するブラジルの木 (Pau-Brasil) であった。この木は焔 (伝説 brésil) のように真紅の染料の原料としてヨーロッパでもはやされた。16世紀後半から、ブラジルで切り出されたブラジルの木はフランス、スペイン、オランダの市場を独占した。この木が、伐採に容易な海岸線から切りつくされてしまい、また化学染料が合成されるようになって輸出品としての価値を失うようになったころ、砂糖の時代となった。

第2番目に登場した砂糖は16世紀後半からしだいに生産が盛んとなり、17世紀には総額2億ポンド(注2)の輸出が行なわれるにいたった。事実1600~1700年のブラジルの砂糖は世界の砂糖取引を席卷した。

砂糖の国際的優位がアンティリヤスの進出にあって崩れ去ると、第3の富として貴金属が脚光を浴びてくる。すなわち17世紀末から金の採掘が盛んとなり、ブラジルは18世紀中葉には世界第1の金輸出国となった。

貴金属の時代が終りに近づくころ、コーヒーが次の主役として出現する。1727年初めてブラジルに移植されたコーヒーは、18世紀末リオデジャネイロ市に近いパレド・パライバの丘陵地帯に植えつけられてから本格的に生産されることとなり、19世紀中葉から重要な輸出商品となった。以後、コーヒー農場は南へ南へと移動しつつ拡大し、19世紀末には世界生産の4分の3を生産するにいたった。もちろん輸出量は年を追って増加した。

資料

第1表 コーヒー輸出量

年	袋
1 8 2 2	190,060
1 8 8 9	5,586,000
1 8 9 9	9,771,000
1 9 0 9	16,881,000
1 9 3 1	17,850,872

(出所) Affonso de E. Taunay, *Pequena História do Café no Brasil*, Rio, 1945.

しかし、コーヒーは安定した需要と価格を有する商品ではない。輸出量は大幅に変動し、輸出価格は激しく上下した(注3)。そのたびにレアルの対外価値は直接影響をこうむって変動し続けたが、1930年代大恐慌の際の下落ははなはだしく、ブラジルをして貿易から国内産業の開発へ、ないしはレアルからクルゼイロへの方向転換を決意せしめるにいたった。

2. 経済恐慌とミル・レイスの終焉

コーヒーに依存したブラジル経済に大打撃を与え、余命いくばくもなかったモノカルチエラ経済の象徴ミル・レイスの死命を制したのは、1929年の経済恐慌であった。

1930年前後、ブラジルのコーヒー生産は世界総生産高の60~70%を占め(注4)、またブラジルのコーヒー輸出高は、ブラジル全輸出額の中でやはり60~70%を占めていた(第2表参照)。

第2表 ブラジル全輸出額に占めるコーヒーの地位

年	比 率 (%)
1 9 2 9	7 1. 0
1 9 3 0	6 2. 0
1 9 3 3	7 1. 2
1 9 3 4	6 1. 1
1 9 3 5	5 2. 6

(出所) Affonso de E. Taunay, *op. cit.*

第3表 恐慌前後のコーヒー

年	ニューヨーク市場サントス4号の価格(lb/cents)	輸 出 量 (100万袋)	交 易 条 件 (1962=100)
1 9 2 9	21.7	14.3	8 4
1 9 3 0	13.1	15.3	5 8
1 9 3 1	8.7	17.8	5 9
1 9 3 2	10.6	12.0	7 6
1 9 3 3	9.2	15.5	6 9

(出所) Lincoln Gordon, *Speech on Terms of Trade and Brazilian Balance of Payments*, Rio de Janeiro, 1963.

恐慌の影響で輸出価格は1929年より急激な低下を見せ始め、1933年には1929年の約2分の1にまで下落した。

第4表 ミル・レイスの対外価値

年	milreis/Stg £	指 数 (1822=100)
1 8 2 2	4.90	100
1 8 5 0	8.35	170
1 8 7 5	8.82	180
1 9 0 0	25.26	516
1 9 2 5	39.60	808
1 9 3 0	44.44	909
1 9 3 5	85.09	1,737
1 9 4 2	79.58	1,630

(出所) Oliver Ónody, *A Inflação Brasileira (1820-1958)*, Rio de Janeiro, 1960, p. p. 22~24.

このため、輸出量にはさして変動はなかったが、輸出額に甚大な影響をこうむった。この結果、ミル・レイスの価値を裏付ける制度の二つに重要な変更が行なわれた。その一つは金本位制の廃止であり(注5)、また他の一つはこのころから種々の形で導入され始める為替管理である。

かくてミル・レイスの対外価値は加速度を加えて下落してゆき、ついに1942年ブラジル政府は、失われた自国通貨の信用回復のために「安定通貨」を採用するというかけ声でデノミネーションを行ない、それまでのミル・レイス(1000レアル)を1クルゼイロとすることとした(注6)。

しかしミル・レイスの廃止とクルゼイロの採用は単純に呼称の変更によって通貨に対する信用回復を狙ったものではない。コーヒーに代表された植民地的経済構造の弱点を恐慌によって思い知らされたブラジル国内で、工業化の動きが強まってきた。そして国際商品の輸出を罪悪視して、国内市場を目的とした産業を興すことが、ファシズムの影響もあった1930年代におけるブラジル国内のナショナリズムに合致していた。ミル・レイスは旧体制の通貨であり、新しく採用するクルゼイロは経済的独立の悲願をこめた通貨であった。

(注2) Roberto Simonsen, *História Econômica do Brasil*, 4ª Edição, São Paulo, 1962, p. 115.

(注3) United Nations, *Instability of Export Markets of Under-Developed Countries*, New York, 1952.

(注4) 以下、収穫期ごとに、1929/30 68.9%、1930/31 56.5%、1931/32 68.0%、1932/33 58.7% (APEC, *A Economia Brasileira e Suas Perspectivas*, Rio de Janeiro, 1964, 統計1~6)。

(注5) 1933年12月4日付 Decreto-lei 第2253号。

(注6) 1942年10月5日付 Decreto-lei 第4791号。

第5表 実質生産指数 (1939=100)

	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946
農業	100	94.7	100.3	93.9	98.4	98.7	97.7	107.5
工業	100	105.1	116.1	112.0	125.0	130.1	137.1	160.2
商	100	94.8	100.8	91.6	98.5	103.9	106.6	120.9
交通	100	107.3	115.4	111.6	115.9	124.2	125.9	128.2
住宅	100	102.0	105.0	108.0	110.0	114.0	118.0	125.0
政	100	100.0	96.9	96.9	84.4	87.5	100.0	106.3
その他サービス	100	100.0	102.7	102.7	102.7	113.5	137.8	154.0
合計	100	100.1	104.9	101.6	104.4	109.6	117.1	128.6

(出所) Grupo Misto BNDE-CEPAL, *Análise Projeções de Desenvolvimento Econômico*, Rio de Janeiro, 1957, p. 15.

第6表 生産指数 (1953=100)

年	鉱工業生産	農業生産
1945	—	69
1946	—	76
1947	60	76
1948	67	83
1949	74	87
1950	82	92
1951	88	94
1952	92	94
1953	100	100
1954	109	112
1955	120	115
1956	128	121
1957	136	127
1958	158	124
1959	178	129
1960	197	135
1961	219	145
1962	232	156
1963	—	161

(出所) Fundação Getúlio Vargas, *Conjuntura Econômica*, Ano XVIII, No. 9, Setembro 1964.

第7表 実質国民所得成長率 (GNP)

年	総 合	1人当たり
1951	5.2	2.0
1952	5.6	2.6
1953	3.2	0.7
1954	7.8	4.7
1955	6.8	3.7
1956	1.9	-1.1
1957	6.9	3.8
1958	7.3	3.5
1959	7.3	4.2
1960	6.3	3.2
1961	7.2	4.1
1962	5.2	2.1
1963	2.0	-1.4

(出所) Banco do Brasil, *Relatório do Banco do Brasil 1961 & 1963*.

II クルゼイロと工業化

ブラジルにとって経済的独立を達成する道は工業化であった。幸いなことにクルゼイロが登場する前後は工業化を促進するのに有利な条件があった。まずコーヒーの長い繁栄は国内にある程度の資本の蓄積を可能ならしめ、コーヒー農場の新しい雇用関係は、それまでの農奴的小作制度に対し、新しい賃金労働者階級を創り出していた。次に1930年代以後のブラジルはたえず消費財の輸入に困難を感じていたため、国内市場の需要が強かった。けだしミル・レイスの下落は輸入価格を騰貴せしめて、国産品の競争力不足を助けたし、戦争中および戦争直後のイギリスやヨーロッパ諸国の輸出能力の弱体化は工業製品の輸入をほとんど不可能とした。

したがって、工業化は主として国内市場向け消費財生産のためのものであった。しかし、工業化の効果はあがった。第5表はクルゼイロが登場した1942年前後の生産指数であるが、戦時下の資本財輸入の困難にもかかわらず工業生産は他産業を凌駕して好調に伸びている。第2次大戦終了後は、外貨の蓄積のあるときは、輸出国の疲弊や対外債権の凍結ないし保有外貨の交換性の欠如等により、また朝鮮戦争後は外貨準備が不足しがちとなったため、いずれにせよ輸入困難がつきまるとして工業化を助けた。

さらに、輸入制限を逃れるためにブラジル国内に工場を建てる外国企業が増加して、輸入代替の工業化が最盛期を迎えるにいたる。

これによって1950年以後の経済成長のテンポは非常に速く、輸入依存度は7~8%まで低下した。経済成長の急速な伸びは、1947年から1961年の間に国民総生産は年

率5.8%, 1人当たりにして3%を記録した(注7)(第7表参照)。

かくてクルゼイロの悲願は達成されるかに見えたのである。しかしながら1962年ごろから成長は停止した。その原因はいろいろあると言えようが、ごく簡単に言えば、工業化の歪み、インフレーションの急進および国際収支の悪化ないし輸入能力の減退の三つに集約されよう。

(注7) Presidencia da República, *Plano Trienal do Desenvolvimento Econômico e Social 1963/1965*, Dezembro 1962, p. 23.

III インフレーション

ブラジルではインフレーションはほとんど恒常的であったが、とくにはなほだしい物価騰貴を記録したのは、1935~39年における年率約30%を除けば、第2次大戦勃発以降であるから、ちょうどクルゼイロの時代と一致する。その動向を振りかえって見ると、戦争直後の1946、1947年に急上昇したのち、1940年代末には一時小康を保った。しかし1950年代にはいると、これが急激な加速度を加えてきて年率30%代の物価騰貴となる。そして1960年代にはさらに速度を加えて、1962年には50%を越え、1963年には70%に達し、1964年にはついに80%を越えた。この結果、クルゼイロの購買力は登場まもない1944年から1965年10月までのわずか20年ばかりの間に、ほぼ150分の1に下落したこととなる(第8表参照)。

このすさまじいインフレーションの原因は戦後急激に増加した投資の影響、農業生産の伸びが鈍かったための生計費騰貴、調和のとれた開発でなかったために顕在化した運輸、エネルギー等のボトル・ネックの増加、労働政策による最低賃金を初めとする賃金の生産性を越えた上昇、賦払制度等信用の膨張、為替政策や物価統制の不手際起因する価格メカニズムの混乱等々枚挙に暇がない。しかし、ブラジル経済構造の問題を離れて、きわめて貨幣的な面に限って見ると、財政の赤字と通貨の増発とに注目せざるをえない。それと同時に管理通貨としてのクルゼイロの発券制度の問題に触れなければならないこととなる。

財政収支は、歳入面では税法および徴税制度の不備、歳出面では政府関係企業の赤字補填と大規模な公共投資の支出によって、1942年から現在まで、1947、1948、1951、1952年を除いてはずっと赤字であった。しかも赤字の額と比率はしだいに大幅なものとなっていった。

ではこの赤字はいかに補填されたかという点、一部国

第8表 卸売物価、通貨流通高

年	G. B. 州生計費	卸売物価	通貨流通高
1944	34	34	31
1945	40	40	38
1946	46	46	45
1947	56	49	49
1948	58	53	49
1949	61	58	53
1950	67	66	63
1951	75	79	78
1952	87	87	85
1953	100	100	100
1954	122	130	122
1955	151	147	150
1956	182	175	174
1957	212	197	204
1958	243	221	251
1959	238	305	312
1960	437	399	406
1961	583	552	595
1962	884	846	871
1963	1,507	1,468	1,344
1964	2,889	2,813	2,648
1965	5,240 ⁽¹⁾	4,504	3,899 ⁽²⁾

(注) (1) 10月。(2) 6月。

(出所) Fundação Getúlio Vargas, *Conjuntura Econômica, Year XII, No. 11*, Rio de Janeiro, Nov. 1965.

債発行等によったが、大部分は政府がブラジル銀行(Banco do Brasil)より行なう借入れによった。一方ブラジル銀行は国庫に必要な紙幣を請求したので、政府借入額のほとんどが通貨の増発となった(第9表参照)。

ここでブラジルの発券制度の概要を説明しよう。そもそも最近までの紙幣発行制度の基礎は、1920年11月13日付法律第4182号によりブラジル銀行内に紙幣の発行および再割引を行なう発券・再割局(Carteira de Emissão e Redescoto)を創設したことに始まる。その後1930年に発券の機能は大蔵省(国庫)に移され、ブラジル銀行の発券・再割局は単に再割局となり(注8)、ブラジル銀行総裁は再割引業務のために必要とする紙幣を大蔵省に請求し、引渡しを受けることとなった(注9)。紙幣の発行限度としては、ミル・レイスからクルゼイロに名称変更を行なったと同時に発効した法律(注10)により、金または為替によって25%が保証されるべきことが定められている。かくて紙幣発行のメカニズムは、ブラジル銀行総裁が再割引業務に必要な紙幣をSUMOCに対して請求し、SUMOCはこれを国庫に請求する。国庫は紙幣を発行してブラジル銀行に預託し、再割引局にこれを運用せしめることとなっている(注11)。

第9表 財政赤字，ブラジル銀行借入れ，通貨発行
(単位：10億クルゼイロ)

	財政赤字	国債	B. B. 借入れ	前年度繰越し その他	合計	通貨発行
1953	9.0	0.9	7.6	0.6	9.1	7.7
1954	5.5	—	3.0	2.5	5.5	12.0
1955	8.0	—	6.2	2.2	8.4	10.3
1956	27.8	0.2	23.9	5.0	29.1	11.5
1957	39.8	—	38.6	1.8	40.4	15.8
1958	26.5	9.4	16.5	1.7	27.6	23.2
1959	53.7	9.1	43.0	2.9	55.0	34.8
1960	77.7	2.2	75.4	2.4	80.0	51.5
1961	130.4	1.5	128.9	10.4	140.8	107.8
1962	280.9	22.8	223.8	46.6	293.2	194.9
1963	504.7	55.5	439.7	35.1	530.3	380.0
合計	1,164	101.6	1,006.6	111.2	1,219.4	849.5

(出所) APEC, *A Economia Brasileira e Suas Perspectivas*, Rio de Janeiro, 1964, F-14.

一方政府がブラジル銀行から借入れを行なう場合には国庫手形をブラジル銀行再割局に差し入れるが、この手形の支払が困難となると、前記預託紙幣をもって手形債務と相殺するという法律を議会に提案するのが例である。結局、税金によって政府がブラジル銀行に差し入れた手形を買い戻せば流通している紙幣の回収となるが、これが不可能の場合には、相殺法によって政府およびブラジル銀行の債権債務関係は清算されるが、紙幣だけが市中に流通することとなる。しかもクルゼイロ末期においては、25%の発券準備はまったく有名無実であったから、通貨は際限なく膨張し続けたのである。

1963年から1964年ごろになると、最早クルゼイロに対する一般の信用は地に落ちた。契約は個人間の家屋の賃貸借にいたるまでドル約款付となったし、若干でも手持ちに余裕資金のある人々は先を争ってドル札を買いあさった。工業界でも、製品の売れ行きは問題なかったが、より安易で確実な利潤追及の道は原材料のストックであるという情勢にまでなった。議会でも安定した通貨を求める声がしだいに現実的となり、「クルゼイロ・フォルテ」「ブラゾン」「クルザード」「コント」「ブラジル」等かざかざの新通貨の名称が提案されて、デノミネーションが議論された。

(注8) 1930年12月24日付 Decreto-lei 第19525号。

(注9) 1937年6月14日付法律第449号。

また、再割引のためばかりでなく、銀行救済のために紙幣の発行を求める制度も併行的に設けられている(1932年6月9日付 Decreto-lei 第21499号)。

(注10) 1942年10月5日付 Decreto-lei 第4792号。

(注11) 1945年2月2日付法律第7293号。
1951年11月21日付 Decreto-lei 第30190号。

IV 国際収支と為替相場

1. 国際収支

最近の20余年間に、ブラジルは工業化の面では一見はなばなしい成果を収めた。経済構造から言えば、明らかにコーヒーにたよっていた農業中心から工業中心へと近代化が進んでいる。しかし国際収支の面では基本的には少しもこのような構造変動は起きていない。依然としてコーヒー、ココア等熱帯性単一作物が輸出の中で最も重要な地位を占めるといふ遅れた構造をそのまま持ち続けているのである。

ブラジルの国際収支統計は1947年より始まる。これによると、ブラジルの国際収支の基本的な構造は、貿易収支において黒字、貿易外収支においてこれを上回る大幅な赤字、そのために經常収支はおおむね赤字であるが、これを資本収支の受取り超過が補う形となっている(第10表)。しかしほぼ慢性的に赤字と言ってよいであろう。

まず貿易収支を見ると、1947年以来かなり大幅な変動はあるが、輸出は年間約13~15億ドル、輸入は11~13億ドル程度であり、この規模は横這いである(第11表)。

これを商品構成で見ると、輸出では国内産業構造の大幅な変化にかかわらず、依然としてモノカルチュア構造で、コーヒーが全輸出額の50~60%を占めている。さらにコーヒーの後に続くものは、これまたココア、砂糖、綿花といった伝統的な国際商品のままである。これらブラジル主要産物は国際商品の中でも特に価格変動が著しい。その上需給の弾力性は低く輸出量の急激な伸張を望めない。

一方輸入主要品目は石油、小麦、機械類等工業製品である。ここでは工業製品の内容に消費財から資本財への変化が認められ、国内の工業化進展に伴う国産消費財による輸入代替が行なわれていることがわかる。しかし輸入は、輸入能力の欠如のために、極端に激重な規制を受けてきたから、この横這いの規模内にあるもので、実際の需要は今までの記録より相当高い水準にあったと思われる。なぜなら国民所得の増加に伴って輸入はいつそう増加するはずであり、かつ、資本財輸入が消費財輸入よりも比率が高い場合には、国内の投資によって輸入需要はいつそう大きくなることが予想されるからである。

資 料

第10表 国 際 収 支

(単位: 100万 U.S. ドル)

年	経 常 収 支			資 本 収 支			誤 差 脱 漏	総 合 収 支
	貿 易 (FOB)	貿 易 外 *	収 支	民 間	政 府	収 支		
1947	130	-300	-170	47	-16	31	-43	-182
1948	278	-322	-44	80	-89	-9	29	-24
1949	153	-274	-121	32	-67	-35	82	-74
1950	425	-321	104	28	-57	-29	-23	52
1951	67	-537	-470	70	-14	56	123	-291
1952	-286	-423	-709	118	2	120	-26	-615
1953	423	-406	17	109	-12	97	-98	16
1954	150	-385	-235	75	-53	22	10	-203
1955	320	-354	-34	109	-70	39	12	17
1956	436	-429	7	248	-47	201	-14	194
1957	107	-406	-299	356	-66	290	-171	-180
1958	64	-330	-266	230	-28	202	-189	-253
1959	72	-417	-345	248	-32	216	-35	-154
1960	-24	-524	-548	176	-84	92	26	-430
1961	111	-399	-288	225	79	304	49	65
1962	-90	-368	-458	187	68	255	-140	-343
1963	112	-294	-182	42	-16	23	-120	-279
1964	344	-197	147	3	9	12	-119	40

(注) * 贈与も含む。

(出所) SUMOC, *Relatório do Exercício de 1961 & 1964*.

第11表 輸 出 入 (単位: 100万 U.S. ドル)

年	輸出(FOB)	輸入(FOB)	収 支
1947	1,157	1,027	130
1948	1,183	905	278
1949	1,100	947	153
1950	1,359	934	425
1951	1,771	1,703	68
1952	1,416	1,702	-286
1953	1,540	1,116	424
1954	1,558	1,410	148
1955	1,419	1,099	320
1956	1,483	1,046	437
1957	1,392	1,285	107
1958	1,244	1,179	65
1959	1,282	1,210	72
1960	1,270	1,293	-23
1961	1,405	1,292	113
1962	1,215	1,304	-89
1963	1,406	1,294	112
1964	1,386	1,080	305

(出所) SUMOC, *op. cit.*

貿易外収支は例外なく毎年赤字である。投下資本、借入金に対する利益、配当ならびに利子の送金、ローヤリティ等導入技術の対価支払、運賃保険料等の支払超過がその内容である。特に工業化の一面として、利潤、利子の対外送金がしだいに大きな重圧となっていることが注目される。

經常収支の赤字はだいたい資本収支の受取り超過によって補われてきた。このうち国際収支の赤字を埋めるた

めにIMF等の国際機関、外国政府よりの借入れもけつして少なくはないが、基本的には外国民間資本の流入が大部分を占めている。しかし最近では外国民間資本の流入は著しく減少傾向にあった。戦後の開発ブームに従って起こった諸外国のブラジルへの企業進出が一巡して新規投資が少なくなったことと、激しいインフレーションとそれによって起こるクルゼイロ下落の危険が、投資の利益に比して大きくなりすぎたためと考えられる。1962年9月には外資利潤送金制限法注12)が成立して、外国資本は完全にブラジルへの興味を失ったかに見えた。1964年4月以降、革命政府は前記法律を緩和する等対外信用の回復に努めた結果、ごく最近では事情は好転しつつはあるが外国資本の流入がないかぎり、国際収支の均衡は計りえないとすれば、ナショナリズムから生まれたクルゼイロの持つ大きな矛盾であるといえよう。

2. 為替相場

国内物価の果てしない騰貴が国内においてクルゼイロの信用を完全に失わしめたと同時に、国際収支の恒常的赤字と変遷きわまらない複雑な為替管理制度によって、クルゼイロは国際的にも最も信用のない通貨の一つであった。

まず、1941年から1945年の戦時中は、外国からの輸入が不可能であったために大幅な出超が続き、為替は非常に自由であった。

1946年2月には戦前(1937年)の交換レートである1ド

ル=18.50クルゼイロによる対外支払を認めた。これはかなりのクルゼイロ過大評価であったが、戦時中に消耗した機械設備の輸入を促進し、国内のインフレーションを緩和するため政策的に「安い外貨」を提供する狙いであった。この基本的な考え方は1948年まで変更はなかった。しかしこの輸入促進政策は多くの問題を含んでいた。第1に、輸入需要は戦時中の欠乏のためにきわめて強かったから、「安い外貨」を提供するまでもなく輸入は増加する傾向にあった。第2に、1937年から1945年までにブラジル国内物価はアメリカの約2倍に騰貴していたから、1ドル=18.50クルゼイロは極端な過大評価であった。第3に、ほとんどの国の通貨に交換性がなかったから、輸入市場はアメリカに限られたため交易条件は不利であった。

やがて1947年から国際収支は大幅な赤字を記録し、

1948年には輸入の事前許可制が設けられる等、直接的數量統制を含めて本格的な為替統制が始まった。この制度は2年続いたのち、1950年、コーヒー価格の上昇により交易条件が改善され、輸入もほぼ安定してクルゼイロの安定期となった。

ところが1951、1952年、朝鮮戦争の拡大を予想して輸

第12表 競売におけるアジオ

12月平均	カテゴリー (Cr/US\$)				
年	1	2	3	4	5
1953	14.50	18.73	27.40	33.28	75.18
1954	32.83	32.02	49.90	59.35	119.28
1955	51.35	49.79	75.74	81.41	206.37
1956	39.08	51.09	74.46	87.91	234.23

(出所) SUMOC, *op. cit.*

第13表 クルゼイロ相場

年	公定	輸出		輸入競売		自由	
		一般	コーヒー	一般	特別	一般	特別
1937	11.40	—	—	—	—	16.03	—
1942	16.58	—	—	—	—	19.64	—
1943	16.59	—	—	—	—	19.63	20.42
1944	16.56	—	—	—	—	19.58	20.04
1945	16.54	—	—	—	—	19.50	19.96
1946	16.50	—	—	—	—	19.42	20.00
1947	18.72	—	—	—	—	23.25	—
1948	18.72	—	18.38	19.66	18.72	—	—
1949	18.72	—	18.38	19.66	18.72	—	—
1950	18.72	—	18.38	19.66	18.72	—	—
1951	18.72	—	18.38	19.66	18.72	—	—
1952	18.72	—	18.38	20.22	18.72	—	—
1953	18.74	28.36	23.36	38.3	136.3	55.00	—
1954	18.82	37.69	31.50	66.5	242.7	76.00	—
1955	18.82	{ 37.06 43.06 50.06	37.06	68.0	324.0	66.75	—
1956	18.82	{ 43.06 55.00 67.00	37.06	63.7	307.7	65.65	—
1957	18.82	{ 43.06 55.00 67.00	37.06	94.6	246.8	90.50	—
1958	18.82	{ 43.06 70.00 138.52	37.06	211.3	319.8	138.52	—
1959	18.92	76.00	76.00	217.9	445.4	203.77	—
1960	18.92	90.00	90.00	228.9	639.9	205.14	—
1961	—	—	134.63	—	—	318.51	—
1962	—	—	181.60	—	—	475.00	—
1963	—	—	314.0	—	—	620.0	—
1964	—	—	742.4	—	—	1,850.0	—
1965	—	—	—	—	—	2,220.0	—

(出所) IMF, *International Financial Statistics*. Banco do Brasil, *Relatório*.

入が急増し、国際収支はふたたび危機に陥った。ここで戦時中蓄積された外貨準備は枯渇し、1953年SUMOC指令第70号による複雑な為替管理が行なわれることとなった。

SUMOC指令第70号は、輸入を商品別に5分類し、それぞれ競売によって輸入権を落札せしめる制度であったから、この場合のクルゼイロ実質相場は競売のプレミアムであるアジオと公定相場の合計である。

1961年 SUMOC 指令第204号により為替レートの単一化が計られるまで、この複數為替制度は続けられる。

最近の制度はブラジル銀行が市中銀行の相場を指導する自由為替制度となっているが、国際収支が極度に悪化したために、ブラジル銀行の指導レートにはたえまない変更が行なわれ、クルゼイロは下落し続けた（第13表）。

（注12） 1962年9月3日付法律第4131号。

結び——クルゼイロ・ノボ——

クルゼイロは、ブラジル経済を自立の方向へ導こうという経済的ナショナリズムに支えられて、強引な工業化を進め、インフレを軽視し、貿易の重要性を忘れていたために、通貨として信頼を失いその生命を終わろうとしている。では、代わって登場することとなっているクルゼイロ・ノボの象徴するブラジル経済はいったいどのような方向を指向するのであろうか。

第1に、よりバランスのとれた経済開発である。これまでの国内市場中心の消費財生産のための工業化ではなく、伝統的な農業、鉱業の重要性をも再認識して、生産性を高め、経済の基礎構造の改善に努めることとなる。

第2に新しい通貨がふたたびクルゼイロの轍を踏まないように金融・財政制度を改め、インフレーション回避のためにあらゆる手段が講じられるであろう。すでに銀行法が制定され、中央銀行が設立されて1966年4月1日から業務を開始した。同時に通貨発行には政治が介入したり、乱発が行なわれないよう制度の根本的改革が進められている。

第3に外国貿易の重要性の再認識である。成長を続けるためには輸入を行なわなくてはならない。そのためには輸出が必要である。では何を輸出するか。ブラジルの期するところは工業製品である。そして直ちに国際競争力のつかないブラジル工業の目標は、第1段階として比較優位に立ちうるラテン・アメリカ域内すなわち LAFTA

地域への輸出である。クルゼイロ・ノボは安定したメキシコ・ペソやアルゼンチン・ペソに伍してラテン・アメリカ地域に君臨する通貨とならなければならない。

クルゼイロ・ノボの採用はこの意味でブラジル経済の再出発を意味するように思えるのである。

（東京銀行アメリカ部 小林利郎）